

[書評]

柴田武著、W. A. グロータース英文

『糸魚川言語地図(上・中・下)』

小林 隆

1. 完成までの経緯

糸魚川調査(1957~61)といえば、日本の方言研究にとっては本格的な方言地理学の開始を意味する記念碑的な調査であった。次々に発表される成果の魅力に引かれ、各地で方言地図の作成が活発になった。『糸魚川言語地図』は、その糸魚川調査の集大成である。この調査には、柴田武氏のほか、W. A. グロータース氏、徳川宗賢氏、馬瀬良雄氏が加わったが、今回の総まとめは柴田氏の手によって行われており、英文解説はグロータース氏が担当している。

糸魚川調査の結果は、関係者により、これまでも多くの発表がなされてきた。しかし、いずれ全体的なまとめを行うという計画は、早くから柴田氏の頭にあったようだ。『言語地理学の方法』初版(1969)のはしがきには、なるべく早い時期に「糸魚川言語図巻」として全資料を公表したいと書かれており、再版(1977)のまえがきにも、「“公約”は、古くなくても必ず果たすつもりである」と述べられている。『糸魚川言語地図』は、この長年の公約が実を結んだものであり、これを実現させた柴田氏の研究者としての良心には、深い畏敬の念を抱かずにはいられない。

『糸魚川言語地図』全3巻は、上巻(1988)、中巻(1990)と順次刊行され、下巻(1995)をもって完成した。3巻といっても、巻ごとに地図集・解説編・英文解説編・データ集の4冊から構成され、下巻には索引編も付いているから、大規模な地図集である。この地図集の作成に関わった人たちの名前も、資金の援助者も含めて内表紙の裏に掲げられている。中でも、方言地理学の具体的な方法を柴田氏に伝授し、完成までこの地図集に携わったグロータース氏の役割は大きい。また、データのコンピュータ処理とそれに基づく地図の作成は、計測工学を専門とする井口三重氏(柴田氏の令嬢)の献身的な努力によるものだという。さらに、このような専門的で膨大な書籍を、おそらく採算抜きで出版した秋山書店の熱意にも、最大の敬意を表さなければならない。

2. 調査について

調査の全体的な規模からすれば、これが日本でも有数の方言地理学的調査であることは疑いがない。対象地域の大きさは局地地図の部類に入り、調査地点数は186地点と小振りであるが、調査項目数は500項目にのぼると言う。さらに、地図化され今回刊行された分布図は3巻合計で932枚であり、公表された方言地図の数では、おそらく本書が過去最高

であろう。

この糸魚川調査の目的は、次の2つにあった(上巻解説編A2「調査の目的」)。

①糸魚川地方の方言に関する情報と分析を提供すること

②方言地理学の方法を開発すること

これらの目的が十分達成されていることは、本書の内容を見れば明らかである。特に②の点については、本書の完成を待たずとも、調査後まもなく発表が開始された個々の論文、とりわけ柴田氏の『言語地理学の方法』により、後続の研究に大きく影響を与えてきた。

「理解語調査」「S式質問」などいろいろな試みが行われた中で、「しらみつぶし調査」の方式は、方法論的な影響の最も大きかったものであろう。その後の局地地図の調査法の主流となった感がある。この方式は、調査地域の全集落を、いわば「しらみつぶし」に調べるものであり、詳細な変化過程の解明にとって、きわめて有効な方法であることが立証された。当初は予定になく、調査が進むに連れて選択された方式であるというから、糸魚川という土地が、方言地理学の実験場としていかに適していたかが知られる。それにしても、目的が異なれば対象地域の規模も異なってくるはずであり、いろいろな密度の調査法があつてよいわけであるが、学界には糸魚川調査の成功以降、無反省にしらみつぶし調査に従い、対象地域の規模を自ずと制限してしまうような傾向がなかったとは言えない。それほど糸魚川調査の影響力が大きかったということであろう。

このほか、特定集落の全数調査や、一校の中学生の全員調査が行われ、分布調査の結果と対比されたことも注目しなければならない。これらは、純粋な方言地理学ではなく、社会言語学の領域に足を踏み入れているものである。すでにこの段階から、社会言語学的な観点を取り込んだ方言地理学が試みられていたことは、特筆に値する。

以上のような調査に関する情報は、解説編やデータ集に非常に詳しく記されている。華やかな分析の前に、まず調査という前提をしっかりと記述しようとする姿勢がうかがえる。

3. 地図化について

3.1. 地図の性格

3冊の地図集に収められた分布図は、どれも美しい。ただし、すべての地図が全地点記号で埋まっているわけでない。それは、この地図集が、歴史推定のための「解釈地図」であり、調査結果を網羅的・均一的に掲げた「資料地図」ではないからである。資料の提示はデータ集に任せることにし、解釈に添うかたちで分布図を描いた、というのがこの地図集の基本的立場である(下巻解説編「むすび」参照)。

方言地図の性格については、以前、評者らが作成した『方言文法全国地図』をめぐって柴田氏と意見を交わす機会があった(柴田武 1990、小林隆 1990)。これには江端義夫氏も加わり、議論が活発化した(江端義夫 1992)。私は、従来の「解釈地図」偏重の傾向に対してその問題点を指摘し、「資料地図」の必要性を強調した。もちろん、「解釈地図」を否定したのではなく、資料からどのように地図が作られているのか、その手続きの明示が必要だと述べたのである。この『糸魚川言語地図』の場合、地図集のほかにデータ集が公表されて

(44) [書評]『糸魚川言語地図(上・中・下)』

おり、両者を対比すれば、地図がどう作られたかは明らかになる。こういうことが可能になったということ自体は、たいへん評価される。

しかし、データ集が付されているからといって、読者にとって、すぐさま資料と地図との関係が理解できるというわけではない。やはり、両者の関係について説明がないと、わかりにくい部分が出てきてしまう。以下に、具体的に指摘してみよう。

3.2. 語形の採用

調査で得られた回答の中からどれを地図化するかという点では、全体的な規則、ないし、個々の項目での解説が必要と思われる部分がある。

まず、「第三者の回答」については、それが採用されている場合とそうでない場合とがある。例えば、B 24「稲架を固定する棒」の *mase* (56210531)・*jokoŋi* (56216564)、B 27「靱殻」の *nuka* (56220047) などは採用されているが、B 8「左利き」の *gittjo* (56129011)、B 46「孵る」の *pueru* (56117447)、B 89「びーまん」の *ŋiŋoŋo* (56119217) などは不採用である。採用する第三者の属性に一定の制限があるのか、あるいは、分布から判断して必要なもののみを拾っているのか、よくわからない。また、「息子の回答」についても、B 27「靱殻」の *nukagara* (56118247) のように採用されているものがあり、この語形は解説で取り上げられているが、一つ若い世代の回答であることと、しかも孤例であることに触れておくべきであろう。

次に、話者が一旦回答したものを別の形に訂正した場合は、例えば、B 6「唇」の *kutjibiro* と *kutjibira* (56201623)、B 8「左利き」の *cidari* と *gitjo*: (56201556)、B 17「自在鉤の横木」の *saru* と *kowariki* (56217308) のように、両方が採用になっている場合が多いようである。しかし、中には B 42「蟻地獄」の 56210416 の地点のように、最初の回答である *kakko* のみが採用され、訂正後の *hakko* が地図化されていないというケースもある。これらについては、話者の訂正があったにもかかわらず、なぜ両方を採用するのかという点と、その処理に項目による違いがあるのはなぜかという点について、説明が欲しいところである。「蟻地獄」の場合には、訂正後の *hakko* の方が、周囲の分布に適合するように見える。

3.3. 語形の統合

採用した語形をどのようにまとめて地図に示すか、という点については、地図集凡例に「地図の凡例にあげた語形は、かなり簡略化して示した」として、音韻に関する事例が出されている。ただし、実際にはそれより大きなレベルでの統合もなされている。

例えば、B 1「太陽」の図では、凡例に、①(o)tento-、②(o)çi(:)-、③ konnitji-、④ no(n)no-と、4つの見出し語形が挙げられているが(-の後ろは接尾辞の *sama*、*san* に当る部分が省略)、これに統合されているのは、データ集によれば次の回答である。

① *tento-*、*otento-*、*tento:-*、*otento:-*、*tent°-*、*otento-*、*tentō-*、*otentō-*、*otentō:-*、*otentō:-*、*teno:-*

② *çi-*、*oçi-*、*çi:-*、*oçi:-*、*oi-*

③ konnitji-のみ

④ nono-, nonno-

統合の結果は妥当と思われるが、音韻レベルを越えた処理がなされていることは明らかである。特に、teno:-を no(n)no-のグループに入れず、(o)tento-のグループに含める点は、語形レベルでの判断がはたらいた結果と考えられる。また、見出し語形の示し方として、長音の形式が統合されていることを、(o)çi(:)-のグループでは、(:)で表示しているにもかかわらず、同じ状況にある(o)tento-のグループではそれがなされていない。なんらかの判断によるものと推測されるが、不明である。

あるいは、B 42「蟻地獄」では、凡例の見出し語形のひとつに、「kakomuji, kako」があるが、上巻解説編 160 頁では「上路川の ka(k)ko, kakkomuji, kakkon のような k-で始まる形」と記されていて凡例と対応しない。データ集で確認すると（上巻 383 頁）、

kakko	56210416	<※ hakko>
kakommuji	56201556	<28 才の女性 : kakon>
kako*muji	56201765	

のようになっていて、凡例とも解説とも一致しない。一定の規則によって処理されたものなのか、単純なミスがからんでいるのかははっきりしない。

また、以上の点と関連して、凡例には、上記「蟻地獄」のように 1 つの見出しに複数の語形を列挙したもの、「太陽」のように () を使ってまとめたもの、あるいは、B 4「雪のかたまり」の ikiŋoro 類のように「類」という表現をとったものがあり、一枚の地図でもそれらが混在している場合が見られる。これらの処理法の違いはどのような基準によっているのか、説明が欲しかった。

以上の語形の採用と統合に関する問題点は、もちろん、データ集が公表されているからこそ取り上げることができたのである。検証可能という点で優れた地図集であることが『糸魚川言語地図』の特色であることは強調しておかなければならないが、データをどのように地図化したかという点については、なおかつ説明が必要と思われるのである。

3.4. 語形の記号化

採用され、統合された語形が地図上でどのような記号によって表現されるのか、という点については、特に詳しい解説が見当たらない。地図集凡例に、「富山県から入ったと思われる語形にはオレンジ色を当て、信州方言にはグリーンを当てるが多かった」とあり、記号の色に地域性をもたせていることを記す程度である。『方言文法全国地図』のように資料性を重視した地図と異なり、解釈地図としての性格をもつ本書では、解釈の結果が鮮明に現れることを第一に、比較的自由に記号化がなされているという印象を受ける。

地図化の手段としてコンピュータを利用したことも、この地図集の大きな特色である。コンピュータを使ったということでは先行例があるものの、これほど大部なものは、日本では本書が最初であろう。機械化をはかることにより、データの処理に正確さが増し、また、複数の項目の総合図を容易に作れるようになったのは進歩である。ただし、解説(上巻

A 16「情報の処理」でも率直に述べられているとおり、『言語地理学の方法』などの手作りの図に比べると、記号のデザインの面で読者に訴えかける力の弱いことも確かである。また、一地点に複数の語形が載るときに記号が重なってしまうのは、記号の形・色によっては非常に見にくい場合がある。この点は、今後の改良点の中でも優先課題であろう。

4. 地図の解釈

この地図集の分布図が「解釈地図」であることは先に指摘した。解釈地図であるからには、解釈が付されていないなければならない。「解説編」の多くの部分は、その目的にあてられている。このあたりの考え方について、解説編下巻の「はしがき」にはっきり書かれている。日本での方言地理学は活発であるが、地図の発表に終わっている場合が多い。それは作図学であっても方言地理学ではない。方言地理学は、地理的分布から歴史を再構するのが目的である、というのがその主張である。

このような考え方に対しては、分布資料として方言地図の価値を認めようとする見方があり(加藤正信 1979)、評者も方言地図および方言地理学の役割をもっと広くとるべきではないかという意見を述べたことがある(小林隆 1984・1990)。しかし、柴田氏の考えは一貫しており、この解説編においても、歴史推定が中心的なテーマになっている。過去において、地図集全体にこれほど徹底して通時的な分析が加えられたものは多くない。その点で本書の立場は鮮明であり、内容には圧倒される。

以上のような『糸魚川言語地図』の趣旨からすれば、解説編の内容にこそ書評の筆を費やすべきかもしれない。しかし、個々の解釈について、その結論を検討するだけの余裕はここではない。全体的な印象としては、分布のありさまを主たる材料とし、それに、話者の年齢差や新古の判断、語源解釈などを手がかりに歴史推定が展開されており、『言語地理学の方法』でとられた分析スタイルが、ここでも踏襲されている、という感じをもつ。

ただし、既発表論文との関係については、「今回、すべてにわたって柴田が改めて推定し直し、書き直した。既発表の内容とかなり違うことがあるが、こちらを柴田による新しい解釈とする」(解説編上巻 101 頁)とあるように、新たな検討が行われている。『言語地理学の方法』で取り上げられた項目と比較してみると、例えば、「肩車」の解釈では、今回の地図集の方が、新しく「でんぐり返し」との関係にも及んでいて視野が広い。また、「おたまじゃくし」の解釈では、「蛙」との関わりについて、「蛙」の項目の箇所でもより詳しく扱われている。このように、今回の方が解釈に厚みを増している部分があるが、それは、全体的な分析を通して、項目間の関係をより詳しく把握できた結果と考えられる。

既発表論文との違いは、具体的な解釈の部分にも見受けられる。例えば、「肩車」について見ると、『言語地理学の方法』では、この地域の中心地である糸魚川町部での変遷として、tegguruma 類 → jūjūkaka 類 → kakkarakatsu 類 → kattendondon 類 → otjūgosan 類という流れを考えているが、本書では、jūjūkaka 類をこの中に位置付けてはいない。また、kakkarakatsu 類は、今回の解釈で、糸魚川町部でも使用されたと考えるのかどうかははっきりしないが、少なくともその成立地については、「根地谷に生まれて北に向けて広がったらしく見え

る」という新しい推定を提示している。また、「おたまじゃくし」について見ると、doko と roko との関係は、旧解釈と新解釈で新古の推定が逆転しており、理解語を根拠にした doko 類の伝播力についても判断が異なっている。あるいは、to:rokko が足の出ない時期のおたまじゃくしを指すかどうかとか、この語の語源は何であるかといった点でも、新旧の解釈に違いが見られる。

これらの点は挙げていけばきりがないが、新解釈がすべて決定案になっているとはかぎらないだろう。読者は新解釈を尊重しながらも、旧解釈にも目を通し、自分なりの検討を加えてみてはどうかと考える。幸い、もとの資料もデータ集として公表されているから、柴田氏の新旧両案とも異なる、読者自身の解釈を生み出すことも可能である。実際、そのような試みは、一部の項目についてはすでになされている(徳川宗賢1986)。こうしたかたちでの積極的な利用を、柴田氏も当然望んでいるに違いない。

5. 発展的研究

『糸魚川言語地図』の刊行は、糸魚川調査の具体的な結果を総まとめしてみせたという点で意義が大きく、日本の代表的な局地方言地図が完成したという歴史的な意味もある。しかし、最初にも述べたとおり、糸魚川調査の成果は、これまでも多くの論文や単行本となって発表されてきており、方言地理学における、理論面での整備や方法論の開発といった基本的な部分は、それらの先行研究ですでにかなりの程度まで論じられてしまっているという感がある。その点で、この地図集の今日的な評価は、今後、本書をいかに利用していくかにかかっていると言える。

そのような課題は、製作者はもちろんのこと、多くの人々の知恵に委ねられるべきであるが、評者の興味からいくつかの視点を示すならば、次のようなことがありうるだろう。

(1) 全国語史との相関

国語史は本来、中央語の歴史にとどまらず、全国的な広がりを見てもった歴史をめざす必要がある。全国地図による大局的な歴史に局地地図の詳細な推定をからませ、文献国語史とも対比することにより、それは成し遂げられるものと想像する。そうした観点から見たとき、『糸魚川言語地図』には興味を引く分布が現れている。「顔」の名称を例にとれば、それは全国的に見て大きくツラからカオへと変遷したと推定されるが、これにはツラが一般称から卑称に転じたことが重要な原因になっていると考えられる(小林隆1983)。ところが、そのツラの価値の変化が、この狭い地域の分布に見事に投影されている。すなわち、B61「顔」によれば、解説が述べるように、tsura を「人間についてのみ言う」「人間にも猫にも言う」「猫についてのみ言う」「猫について言うが卑語である」という各分布が、山間部から海岸部に向けて推移しており、この順に変化が進んだことが推定される。国語史上、「顔」の名称の変遷においてひとつのポイントとなる変化が、糸魚川という一地域の中でも細かく観察できることは注目される。

(2) 東西方言の接触状況

糸魚川は方言上、多くの東西境界線が走る地域にあたっており、従来、大局的に眺めら

れてきた東西方言の対立を、地域のレベルで把握することができる。

例えば、B 5「七日」では東の nanoka の上に、西の nanuka が広まってきている。また、B 37「うろこ」でも東の kokera の上に、西のウロコの変種である uruko や uriko が広がっている。これらの事例からは、西日本語形の勢力が一方向的に強いように見えるが、さらに複雑なケースもある。例えば、B 145「薬指」では東の kusurijubi の上に西の benisajjubi が広まり、あらためて kusurijubi が勢力を得たと推定されている。また、B 110「一昨日」の場合には、西日本語形の ototsui の上に東日本語形の ototoi が伝わり、さらに新しく、地方共通語としての ototsui と、全国共通語としての ototoi が広がって複雑に歴史を構成していると考えられている。これらのことは、東西語形の接触地帯においては、両者の関係が一方向的なものではなく、互いの勢力が行きつ戻りつするような、重層的な歴史が存在することを示唆していて興味深い。

(3) 隣接地域との比較

『日本語地図図』のような全国地図との対比とは別に、周囲の地域の方言地図との比較により解釈の厚みを増すということも、方法論的に重要である。例えば、西側の下新川地方には永瀬治郎氏の調査があるが、その成果は B 139「間食」や B 156「氷/つらら/ぬかるみ」で利用されており、一方、永瀬氏の方でも糸魚川調査の結果を推定に役立てている(永瀬治郎 1972)。評者も東側の直江津・高田を中心とした地方で方言地理学的な調査を行ったことがあるが、例えば、「ものもらい(麦粒腫)」については、目にできる悪性の腫れ物であるメバスの類の扱いや、共通語形と一致するモノモライの新古などで、この地図集の解釈(B 168)とはやや異なった推定に至っており(小林隆 1981)、相互の結果を比較・検討する必要を感じている。また、南側の信州方面については、全集落調査ではないものの、馬瀬良雄氏の「長野県言語地図」(1993)があり、対比の可能な項目が含まれている。共通項目について、これらを連続させた広域地図の作成も興味の湧くところである。

(4) 方言地理学の定点観測地域

糸魚川調査は 1957 年から 61 年にかけて実施されたが、約 20 年後に同じ地域が再度調査されている(柴田武・石川恵美子 1977)。その結果によれば、衰えを見せた方言形がある一方、変化がなかったり、むしろ勢力を増した方言形も見られた。また、どの地域の方言も一律に衰退するのではなく、谷の奥の方言形は残りやすいという傾向が現れている。共通語化が進行する中で、それに抵抗する要素のあることは興味深い。また、共通語は空から降るように地域に関わりなく広まると言われているが、それに反した結果が出ているのも注目される。これらの状況は、その後どうなっているのだろうか。今年 1997 年は、最初の調査からちょうど 40 年後にあたっている。国立国語研究所が言葉の定点観測地点として、北海道の富良野や山形の鶴岡を定めている発想を借りれば、「方言地理学の定点観測地域」として糸魚川を設定し、将来の方言分布の動向を 20 年ごとに探っていくような試みがあってもよいはずである。

最後に、個人的な感慨を述べることを許していただくならば、評者が方言地理学の道を

志したのは、糸魚川調査に魅せられたことが大きかった。卒業論文で郷里の方言地図を作るために、糸魚川研究室の置かれていたグロータース氏のもとを何度か訪問し指導を受けたが、柴田氏にもそこで初めて会うことができた。思えばその頃その場所では、『糸魚川言語地図』の完成に向けた作業が営々と続けられていたのだ。それが今、大冊の結晶となって目の前にある。膨大な資料を相手にした方言地図の作製が、地道な積み重ねによらなければ成し得ないことは、評者も経験している。だからこそ、本書が多くの人たちに積極的に利用されることを期待して止まない。本書は、日本の方言地理学にとって、ひとつの到達点ではあるが、同時に、新たなスタートでもあってほしいと願う。

文 献

- 江端義夫(1992)「方言地図作成法の諸問題」『日本語学』11-6臨時増刊号「特集—方言地図と文法」
- 加藤正信(1979)「日本における言語地理学の現状と問題点」『国語学』119「特集—言語地理学の諸問題」
- 小林 隆(1981)「高田西部における「ものもらい」の言語地理学的研究」『新潟県社会科学研究紀要』16
- 同 (1983)「〈顔〉の語史」『国語学』132
- 同 (1984)「言語地理学の役割」『日本語学』3-1
- 同 (1990)「方言地図の方法について——柴田武氏「書評 国立国語研究所編『方言文法全国地図1』」を読んで——」『国語学』163
- 柴田 武(1969、再版1977)『言語地理学の方法』筑摩書房
- 同 (1990)「書評 国立国語研究所編『方言文法全国地図1』」『国語学』162
- 柴田 武・石川恵美子(1977)「糸魚川方言の20年間」『日本方言研究会第24回発表原稿集』(井上史雄他編『日本列島方言叢書11 北陸方言考①』)に再録
- 徳川宗賢(1986)「方言地図とその解釈——糸魚川のタンポポ・カタグルマ・シアサツテ——」宮地裕編『論集日本語研究(2)歴史編』明治書院(徳川『方言地理学の展開』)に再録
- 永瀬治郎(1972)「雪水と氷の語彙体系」『国語学研究』11
- 馬瀬良雄(1993)「長野県言語地図」『長野県史 方言編』長野県史刊行会

(上巻 [地図集 274 頁・解説編 344 頁・英文解説編 203 頁・データ集 1126 頁] 1988 年 7 月 14 日発行 本体価格 95000 円、中巻 [地図集 293 頁・解説編 232 頁・英文解説編 196 頁・データ集 736 頁] 1990 年 3 月 20 日発行 本体価格 95000 円、下巻 [地図集 374 頁・解説編 183 頁・英文解説編 171 頁・データ集 817 頁・索引編 115 頁] 1995 年 7 月 14 日発行 本体価格 130000 円 いずれも秋山書店刊。なお、この地図集はすべての地図がコンピュータで利用できるように、プログラムソフトおよびデータが販売されている。連絡先は、井口三重氏 [TEL/FAX 03-3945-3188])

——東北大学助教授——

(平成9年10月14日 受理)